OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バンバラ語のアクセントについて
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2017, 28, p. 91-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』28 号（2017）91-108
大阪大学大学院言語文化研究科スワヒリ語研究室発行

バンバラ語のアクセントについて*

小森　淳子

0. はじめに

バンバラ語はニジェール・コンゴ語族、マンデ語派に属し、マリ共和国で広く話されている言語である。首都バマコから東部のセグ、モプティにかけて母語話者が 400 万人以上おり、第二言語使用者は 1 千万人以上とみられる（Ethnologue, 19th ed.）。セネガルのマンディンカ語（マリンケ語）やギニアのマニンカ語、シエラレオネ、リベリアのマンディンゴ語、コートジボワールのジュラ語などは非常に近い方言関係にある。

バンバラ語は正書法が確立されており、雑誌や書籍なども発行されているが、一般の出版物ではアクセント表記がないのが普通である。バンバラ語のアクセントは、高・低の二つが認められており、おおむね語単位でアクセントのパターンが決まっているが、複合語を作る時や文中にあらわれる時にアクセントが変動する。本稿ではバンバラ語のアクセントについて、先行研究[1)] を参考にしながら、語単位でのあらわれ方、複合語や文中でのあらわれ方などを概観し、そこにみられる規則や表記の問題について考察する。

1. バンバラ語の音声と表記

バンバラ語の正書法は 1966 年、ユネスコの識字教育キャンペーンがおこなわれる中で制定された。ローマ字と音声記号を併用したもので、一般の出版物などはこの表記に従っているが、研究書や論文などでは独自の表記も見られる。以下では、Bird et al.（1977）、Dumestre（2003）、Kastenholz（1998）を参考に、バンバラ語の音声と表記について概観する。

* 本稿は 2016 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造の形態・統語論比較研究」（課題番号 16K02672 研究代表者 小森淳子）による研究の成果の一部である。

1) アクセントの表記について参考にした文献は、Bird et al.（1977）、Courtenay（1974）、Creissels & Grégoire（1993）、Dumestre（2003）、Kastenholz（1998）、Rialland & Badjimé（1989）である。音声資料については、Bird et al.（1977）と Bird & Kanté（1976）の HP 上で公開されている録音と、バンバラ語話者の調査協力者（2013～2015 年、神戸に滞在していたマリからの留学生 MS 氏）から、Fonana & Traoré（2003）をもとに聞き取り調査した録音を参考にしている。

1.1. 母音

口母音は 7 つあり、それぞれに長短がある。短母音は [i, e, ɛ, a, ɔ, o, u] の 7 つであり、これらの音声記号をそのまま用いて表記する。長母音は短母音を 2 つずつ並べて、次のように表記する。

ii [i:]　ee [e:]　ɛɛ [ɛ:]　aa [a:]　ɔɔ [ɔ:]　oo [o:]　uu [u:]

口母音の長短の対立がみられる例をあげておく。

(1)	káre	「通り、街区」	káare	「バス」[2]
	bàna	「病気」	bàana	「金持ち」
	bɛ́	「ある、いる」	bɛ́ɛ	「すべての」
	fɛ̀rɛ	「広場」	fɛ̀ɛrɛ	「方法、やり方」
	wɔ́rɔ	「皮をむく」	wɔ́ɔrɔ	「６」
	nɔ́rɔ	「貼りつく」	nɔ́ɔrɔ	「栄光」

鼻母音も 7 つあり、それぞれの母音に n を加えて、下のように表記する[3]。

in [ĩ]　en [ẽ]　ɛn [ɛ̃]　an [ã]　ɔn [ɔ̃]　on [õ]　un [ũ]

口母音と鼻母音の対立が見られる例をあげておく。

(2)	bá	「川」	bán	「終わる」
	kɛ́	「する」	kɛ́n	「油、脂肪」
	sí	「髪」	sín	「乳房」
	kólo	「骨」	kólon	「怠惰な」
	kɔ́gɔ	「胸」	kɔ́ngɔ	「空腹」[4]

---

[2] 表記には慣例的なアクセント記号を付しているが、アクセントついては後に議論する。

[3] 鼻母音は基本的に短いが、例外的に長い鼻母音も見られるようである。その場合は、母音を二つ並べて後ろに n と表記する（Kastenholz 1998:13, Dumestre 2003:19）。

mɛ́n [mɛ̃] 「聞こえる」（短い鼻母音）　　mɛ́ɛn [mɛ̃:] 「続く」（長い鼻母音）

[4] 鼻母音が語中にある時、実際には鼻音性が減じて [Vn] （V は弱い鼻音、n は後ろの子音に同化した鼻子音）と発音される（Creissels & Grégoire 1993: 111）。

dén [dẽ] 「子ども」　　dénba　[demba] 「大きい子ども」

1.2. 子音

子音は音素的に 19 あるいは 20 が認められる。バンバラ語では [z] は / s / の異音であるが、外来語に多くの [z] がみられるので、これを一つの音素として数えると 20 の子音があることになる。以下に、20 の子音の表記と音声をあげる。

表 1　バンバラ語の子音

p [p]　b [b]	t [t]　d [d]	c [c]　j [ɟ]	k [k]　g [g]
f [f]	s [s]　z [z]		h [h]
m [m]	n [n]	ɲ [ɲ]	ŋ [ŋ]
	r [ɾ]		
w [w]	l [l]	y [j]	

バンバラ語では鼻音の後の s は [z] で発音されるが、音素表記のまま s と表記する（下の (3) 参照）。フランス語からの外来語の [z] や [ʒ] は、バンバラ語では [z] で発音されるので、(4) のようにそのまま z で表記する。

(3)　nsíirin　[nzí:rĩ]　「物語り」
　　nsón　[nzõ]　「さび」
　　Nsán　[nzã]　「男子名　ンザン（次男につけられる）」

(4)　gázi　[gazi]　「ガス」　＜　gaz　[gaz]（仏語）
　　zúuwen　[zu:wẽ]　「６月」　＜　juin　[ʒɥɛ̃n]（仏語）
　　zúluye　[zuluje]　「７月」　＜　juille　[ʒɥijɛ]（仏語）

わずかの例に [ʃ] も観察されるが、それは下の (5) に見られるように、外来語や i, u の前での s の自由変異音として、また (6) のように限られた単音節の語に見られる。

(5)　syu　[ʃu]　「キャベツ」＜　chou [ʃu]　（仏語）
　　sì　[si ～ ʃi]　「夜を過ごす」　（自由変異の例は、Dumestre 2003:17）
　　kùlusi　[kulusi ～ kuluʃi]　「ズボン」

(6)　syɔ　[ʃɔ]「豆」
　　syɛ　[ʃɛ]「ニワトリ」
　　syɛn　[ʃɛ̃]「ひっかく」

(5) の「キャベツ」や (6) のそれぞれの語の表記法は定まっておらず、テキストによって異なる表記が見られる。たとえば (6) の「豆」には、sɔ, shɔ, syɔ, siyɔ などが見られる。[ʃ] は例が少ないので、一つの音素としてたてるより、次に見る音節との関係から、sy の連続が [ʃ] として実現すると考えるほうが妥当である[5)]。つまり、「豆」は syɔ、「キャベツ」は syu、「ニワトリ」は syɛ、「ひっかく」は syɛn と表記し、実際の発音は sy が [ʃ] になるということである。

1.3. 音節

バンバラ語の音節は CV の開音節が基本である。他に、母音だけの音節 V、成節鼻音だけの音節 N、前鼻子音のついた音節 nCV があり、例は少ないが、子音の後ろに半母音が入る CwV, CyV の音節も認められる。成節鼻音や前鼻子音は後ろの子音の調音点に同化する。それぞれの音節の例を以下にあげる（ [.] は音節の切れ目を表す）。

(7)　CV　fɔ́　[fɔ]　「言う、話す」
　　ɲɛ́　[ɲɛ]　「目」
　　dón　[dõ]　「日」
　V　à　[a]　「彼、彼女、それ」（3 人称単数代名詞）
　　án　[ã]　「私たち」（1 人称複数代名詞）
　　-w　[u]　（名詞複数接尾辞）[6)]

---

5) síya「種類、民族」などの語は 2 音節で発音されることから、siyV- の音声連続が [ʃV] となるとは解釈できない。そのため、半母音の入った syV- の連続が [ʃV] になると解釈するのが妥当であると考えられる。

6) 名詞の後について複数を表す接尾辞は [u] であるが、正書法では名詞の最後に w をつけて書く。バンバラ語では一語の中で母音が連続することはないが、複数形になった場合にのみ母音が連続することになる。

mùso	「女」	mùsow	[musou]	「女たち」
cɛ̀	「男」	cɛ̀w	[cɛu]	「男たち」
dén	「子ども」	dénw	[dẽu]	「子どもたち」

N	ń	[N]	「私」(1 人称単数代名詞)
	ǹba	[m.ba]	(N. CV)(挨拶に対する男性の返答)
	ǹse	[n.se]	(N. CV)(挨拶に対する女性の返答)
nCV	ngɔ̀n	[ŋgɔ̃]	「ヒヒ」
	nbúuru	[mbu:.ru]	(nCV. CV) 「パン」
	ntòla	[nto.la]	(nCV. CV) 「ボール」
CwV	gwà	[gwa]	「台所」
	kwé	[kwe]	「スズメバチの巣」
CyV	byɛ̀	[bjɛ]	「膣」
	myɛ̀	[mjɛ]	「肉に対する食欲」
	fyé	[fjɛ]	「吹く」
	syɔ̀	[ʃɔ]	(< sjɔ) 「豆」[7]

1.4. アクセント表記

バンバラ語の正書法におけるアクセント表記は厳密には決まっておらず、一般の出版物などでは表記がないのが普通である。バンバラ語は高・低の二つのアクセントが基本で、語単位でおおよそのアクセントのパターンが決まっていることから、語頭の音節に H (´) か L (`) の記号をマークするのが慣例となっている。本稿でこれまでに挙げてきた例にも、その慣例に従ってアクセント記号を付してきた。しかし、実際のアクセントは文や句のレベルは言うまでもなく、語単位でも二つのパターンだけで捉えることができるわけではない。次節でアクセントのパターンと変化について、詳しく見ていくことにする。

2. バンバラ語のアクセント

バンバラ語のアクセントは音節が担い、高 (H)、低 (L) のほか、上昇 (LH)、下降 (HL) のアクセントが見られる。基本的な語は 1、2 音節のものが多く、3 音節以上の場合は基本語に加えて、語源的に複合しているものや接辞がついたものが多くなる。語のアクセントパターンには偏りが見られ、2 音節以上の場合、すべての音節が H である H 型と、語の前

[7] 1.2 節でみたように、syV の表記の音声は [ʃV] であり、[sjV] ではない。
なお、CyV の C には b, m, f, s のみが、CwV の C には k, g のみがあらわれ得る。
また、長母音の時に CyV の自由変異が見られる場合もある (Dumestre 2003:20)。
fèere [fe:re ～ fje:re] 「売る」、 bɛ́ɛlɛ [bɛ:lɛ ～ bjɛ:lɛ] 「深皿、ボール」

半が L で後半が H である LH 型の 2 つのパターンが多くなる。以下に、単独の語と複合語のアクセント、文中にあらわれるアクセントのパターンをみていこう。

2.1. 語のアクセントのパターン

1 音節の語が単独で発音される場合、名詞以外の語のアクセントは H か L であるが、名詞のアクセントは下降調の HL か上昇調の LH になる。

(8) 1 音節の語

名詞以外の語

H	fó 「言う」	dɔ́n「知る」	ká（所有詞）	ń（1 人称単数代名詞）
L	fò 「挨拶する」	dɔ̀n「踊る」	wà（疑問標識）	à（3 人称単数代名詞）

名詞

HL	bâ「川、母」	sô「家」	jî「水」	dên「子供」	dôn「日」
LH	bǎ「ヤギ」	sǒ「馬」	cɛ̌「男」	sǎn「年」	kǔn「頭」

Rialland & Badjimé（1989）や Dumenstre（2003）が指摘するように、名詞が単独で発音される場合は、普通「限定形」であらわれる。限定形は名詞（句）の後に限定詞がついた形であるが、限定詞は L の浮遊アクセントである。それゆえ HL の名詞は、H のアクセントをもつ語に限定詞の L がついた形と解釈される。LH の名詞は、実際には LHL のアクセントで発音されるという（Rialland & Badjimé 1989:4, Dumenstre 2003:25）。これも末尾に限定詞の L がついた形であるが、(8) では限定詞 L のない LH の形で記述してある[8)]。したがって、1 音節の語は H、L、LH のいずれかのアクセントをもっているということになる。

Dumenstre（2003）は、バンバラ語のアクセントは音節数に限らず、H 型（すべての音節が H）と LH 型（語の前半が L で後半が H）に分けることができ、語全体の 90%以上はこれらの型に属しており、それ以外はマイナーな型であるとしている。確かに、2 音節の語では HH と LH のパターンは多い。

8) 筆者の観察するところによると、LH の名詞は LHL には聞こえず、LH であるのが普通である。1 音節に LHL では長すぎるので、慣習的に LH で発音されているのかもしれない。いずれにしても、LH の名詞は語のアクセントとして LH をもつことになる。

(9)　2 音節の語の主要なアクセント[9)]

HH	wárí「お金」	jírí「木」	kɔ́nɔ́「お腹」	fúrá 「葉」
	náaní「4」	dúurú「5」	míirí「考える」	fúrú 「結婚する」
LH	mùsó「女」	fìní「服」	mɔ̀gɔ́「人」	mìsí 「牛」
	kàsí 「泣く」	fàgá「殺す」	jòlí 「いくら？」	
	fìlá 「2」	mùgán「20」	kɛ̀mɛ́ 「100」	

主要なアクセント以外のパターンには、以下のようなものが見られる。

(10)　2 音節の語のその他のアクセントパターン

HL	sáhà「こんにちは」（「ようこそ」に対する返答）
	wálà「あるいは」　sísàn「今」　kúnùn 「昨日」[10)]
LHL	ǹbâ 「こんにちは」（挨拶に対する男性の返答）
	ǹsê 「こんにちは」（挨拶に対する女性の返答）

3 音節の語においても H 型と LH 型が多い。3 音節の場合の LH 型とは LLH と LHH のパターンである。

(11)　3 音節の語のアクセントパターン（H 型と LH 型）

HHH	súrúkú「ハイエナ」	míníɲán「ニシキヘビ」	súkáró「砂糖」
LLH	nàmàsá「バナナ」	fùntèní「暑さ、熱」	sùnɔ̀gɔ́「眠り、眠る」
LHH	jàkúmá「ねこ」	mìsírí「モスク」	sàbárá「靴」

Courtenay（1974）もおよそ 85%の語が H 型か LH 型であるとしているが、それ以外のパターンも無視できるものではないとして、その他のパターンも列挙している。3 音節の場合、他に以下のようなパターンが認められるが、例は多くない。

---

9)　名詞の場合、単独で発音される時は語尾に浮遊アクセント L がつき、いずれの語も語末が下降調（HL）で発音されるが、ここでは語末の L を表記していない。

10)　Dumenstre（2003）では、sísǎn「今」、kúnǔn「昨日」というように、この 2 つの語の後ろのアクセントは上昇調 LH で表されている。これは方言差によるものと考えられる。

(12) 3 音節の語のその他のアクセントパターン

HLH tásàlén「やかん」 bámànán 「バンバラ」 mángòró「マンゴー」[11)]

LHL Dàwúdà「ダウダ」（人名） àmíinà 「アーメン」

HHL Kéyítà「ケイタ」（人名）

（HLL、LLL のアクセントは見られない）

複合語でない 4 音節以上の語は少ないが、それでも H 型か LH 型をみることができる。

(13) 4 音節以上の語（H 型と LH 型の例）

HHHH kɛ́lɛ́kɛ́lɛ́「唐辛子」

LLHH bèlèbélé「大きい」 dɔ̀gɔ̀tɔ́rɔ́「医者」

LLLH jàhànàmá「地獄」 àlìmɛ̀tí「マッチ」

4 音節では他に、次の 4 つのパターンが見られる（Courtenay 1974）。

(14) HHLH fógónfògón「肺」

HLHL kúnàsínì「おとおい」

LHLH làgánsàrá「夕刻の祈り」

LLHL Màlìsájò「マリサジョ」（人名）

5 音節以上の語では、H 型と LH 型にわずかな例が見られる（Courtenay 1974: 320）。

(15) HHHHH gɔ́fɛ́ránámán「政府」

LLHHH kèngènkókóyó「おたふく風邪」

LLLHHH mìlìkìmáláká「ジグザグ」

バンバラ語の語のアクセント表記は、慣例では語頭の音節に H か L のみを表記するものが主流である。主なアクセントパターンが H 型か LH 型である点から考えられた表記であるが、これだけでは不十分な点がある。2 音節の語では、主要なアクセントである H 型と LH 型以外のパターン（具体的には HL、LHL）には、それぞれのアクセントを付すべきである。また 3 音節以上の語の LH 型については、たとえば 3 音節語では LLH と LHH の違

11) Dumenstre（2003）では「マンゴー」は mǎngòró と、最初の母音が上昇調になっている。

いがあるように、それらを区別して示す必要がある。また、3 音節以上の語の少数ではあるがさまざまなアクセントパターンについても､それぞれにアクセントを示す必要がある。

2.2. 複合名詞のアクセント

バンバラ語のアクセントの主要なパターンが H 型と LH 型であるのは、複合名詞のアクセントにも見ることができる。複合名詞が作られる場合、全体のアクセントは H 型か LH 型になる。前の名詞が H で始まる語であれば、(16) のように、他の語や音節に L があっても、複合名詞全体が H 型になる。

(16)

dén「子ども」	＋	-kɛ́「男の」	→	dénkɛ́「息子」
básá「トカゲ」	＋	kóló「骨」	→	básákóló「トカゲの骨」
dén「子ども」	＋	mùsó「女」	→	dénmúsó「娘」
só「家」	＋	mɔ̀gɔ́「人」	→	sómɔ́gɔ́「家族」
nún「鼻」	＋	wò「穴」	→	núnwó「鼻孔」
bámànán「バンバラ」	＋	dùgú「村」	→	bámánándúgú「バンバラの村」

前の名詞が L で始まる語であれば、(17) のように、全体が LH 型になる。この場合の LH 型とは前の名詞がすべて L、後ろの名詞がすべて H というパターンである。

(17)

wùlú「犬」	＋	-kɛ́「男の」	→	wùlùkɛ́「オス犬」
wùlú「犬」	＋	mùsó「女」	→	wùlùmúsó「メス犬」
dùgú「村」	＋	tìgí「所有者」	→	dùgùtígí「村長」
nɛ̀gɛ́「鉄」	＋	sò「馬」	→	nɛ̀gɛ̀só「自転車」
dɔ̀gɔ̀tɔ́rɔ́「医者」	＋	só「家」	→	dɔ̀gɔ̀tɔ̀rɔ̀só「病院」

名詞＋形容詞の場合も、アクセントパターンは複合名詞の場合と同じになる。

(18)

jírí「木」	＋	jɛ́mán「白い」	→	jírí jɛ́mán「白い木」
móbílí「車」	＋	bèlèbélé「大きい」	→	móbílí bélébélé「大きい車」
sò「馬」	＋	jɛ́mán「白い」	→	sò jɛ́mán「白い馬」
nɛ̀gɛ̀só「自転車」	＋	ɲùmán「新しい」	→	nɛ̀gɛ̀sò ɲúmán「新しい自転車」

(18) の「形容詞」は形容詞的な意味を表しているが、正確に言うと形式的には名詞である。それゆえ、これらの例も複合名詞のアクセントパターンをとると言える。複合名詞のこのようなアクセントパターンは、アクセントの「集約」として知られている（Dumenstre 2003:24, 97、Creissels & Grégoire 1993:109）。バンバラ語の名詞のアクセントが H 型と LH 型が基本であり、複合名詞もそのパターンに「集約」されると言える。一方、名詞と数詞の連続や、文の中にあらわれる語にアクセントの変化がみられることがある。次にそのアクセントの変化をみていこう。

2.3. 句や文の中にみられるアクセント

上にみた複合名詞のアクセントは、結合度が高いゆえに H 型か LH 型に「集約」されると考えられる。結合度が低い場合は異なるアクセントパターンが見られる。名詞＋数詞の場合や、文の中にあらわれる語のアクセントである。

まず、名詞＋数詞のアクセントパターンをみてみる。数詞は名詞のうしろにくるが、数詞が H 型の場合は複合名詞のアクセントパターンと同じになる。つまり、前の名詞が H 型であれば全体が H 型に、LH 型であれば全体が LH 型になる。

(19)
só「家」	＋	kélén「1」	→	só kélén	「1 軒の家」
lákɛ́rɛ́「チョーク」	＋	náaní「4」	→	lákɛ́rɛ́ náaní	「4 本のチョーク」
mùsó「女」	＋	kélén「1」	→	mùsò kélén	「1 人の女」
sìgìlán「いす」	＋	náaní「4」	→	sìgìlàn náaní	「4 脚のいす」

複合名詞のアクセントパターンと異なるのは、数詞が LH 型の場合である。数詞が LH 型の場合、前の名詞のアクセントは変わらず、数詞が LL になる。

(20)
só「家」	＋	fìlá「2」	→	só fìlà	「2 軒の家」
lákɛ́rɛ́「チョーク」	＋	sàbá「3」	→	lákɛ́rɛ́ sàbà	「3 本のチョーク」
mùsó「女」	＋	fìlá「2」	→	mùsó fìlà	「2 人の女」
sìgìlán「いす」	＋	sàbá「3」	→	sìgìlán sàbà	「3 脚のいす」

(19)では LH の名詞が LL に、(20)では LH の数詞が LL になっている。いずれもアクセントの変化がみられるのは LH の語である。LH から LL への変化は文中においてもみられる。下の(21)では LH の動詞 kùnún「飲み込む」が文末と感嘆詞 dɛ́（H アクセント）の前で LL になっている。

(21)a. ń yé à kùnùn [12)] 「私はそれを飲み込んだ」
1s PERF 3s 飲み込む

b. ń yé à kùnùn dɛ́ 「私はそれを飲み込んだんだ！」
1s PERF 3s 飲み込む EXCL

c. ń yé à kùnún wà 「私はそれを飲み込んだのか？」
1s PERF 3s 飲み込む QST

（Courtenay 1974:308）

下の(22)は LH の fàlí「ロバ」と sɔ̀rɔ́「見つける」が LL になっている例である。

(22)a. à má fàlì yé 「彼（女）はロバを見なかった」
3s NEG.PERF ロバ 見る

b. à má fàlí sɔ̀rɔ̀ 「彼（女）はロバを見つけなかった」
3s NEG.PERF ロバ 見つける

（Creissels & Grégoire 1993:115）

LH の fàlí「ロバ」は、(22a)のように H の前では LL になるが、(22b)のように L の前では LH のままである。また、(22b)の sɔ̀rɔ́「見つける」は文末で LL になっている。(19)〜(22)の例をみると、LH の語が LL になるのは、句末あるいは文末にくる場合と、後ろに H がある場合である。逆にみれば、後ろに L がある場合は LL にならず、語の境界を越えて L が続くようなアクセントが避けられていると言える。

以上みてきた LH から LL への変化は、一つの語の中に見られる変化であるが、語の境界を越えて LH の連続が LL になる場合がある。それは L の 1 音節からなる主語の後ろに H

12) バンバラ語の基本語順は「主語 補助詞 目的語 動詞」(SXOV) である。

の補助詞やコピュラがくる場合で、補助詞やコピュラが L になる。ただし、補助詞やコピュラの後ろに L がある場合は変化しない（Courtenay 1974: 309、Bird et al. 1977:11）。下の(23)は補助詞 bɛ́（現在）の例である。(23a)では H であるが、(23b)では L になっている。

(23)a. à bɛ́ kàsì lá 「彼（女）は泣いている」
3s PRES 泣く PP
b. à bɛ̀ yɛ́lɛ́ lá 「彼（女）は笑っている」
3s PRES 笑う PP

下の(24)はコピュラ yé の例である。バンバラ語のコピュラは補語の名詞を 2 つの yé ではさむが、アクセントに変化がみられるのは前の方の yé である。

(24)a. nìn yé sò yé 「これは馬だ」
これ COP 馬 COP
b. nìn yè só yé 「これは家だ」
これ COP 家 COP

このように語境界を越えて LH が LL になるのは、L の主語と補助詞やコピュラが連続した場合にのみ見られる現象であり、動詞などでは見られない。下の(25)の動詞 bɔ́「来る」は前が L の主語、後ろが H の接辞であるが、L にはならない。

(25) à bɔ́-rá ségú 「彼（女）はセグから来た」
3s 来る-PERFintr セグ

以上、名詞＋数詞を含めて文中での語のアクセントの変化をみた。ここでの特徴は LH が LL に変化することであるが、これは L の波及（spreading）という考えをとると理解しやすい。

2.4. Lの波及（spreading）とHの指定について

LH が LL になるような変化は、自律分節的（autosegmental）なアクセントの付与という考えに基づいて、L が語中の右の音節に波及すると考えるとわかりやすい。Cleissels & Grégoire (1993) は、バンバラ語では L が有標で語彙的に指定されており、その L が語中の右隣の音節に波及するとしている。Rialland & Badjimé (1989) でも、LH の語には L だけが指定されており、それが左の音節から順番に付与されるという考えを示している。

Cleissels & Grégoire は基底では H は指定されておらず、最終的に L が付与されなかった音節にデフォルトとして付与されるとしている（Creissels & Grégoire 1993:110, 116）。そして、L が波及するのはその語の後ろに L がない場合であり、後ろに L がある場合は L の波及が阻止されるという。Cleissels & Grégoire の説を、名詞＋数詞の例で説明すると以下のようになる。

(26) mùso 「女」 kelen 「 1 」 （語彙のレベルでは L だけが指定されている）
↓
mùsò kelen （後ろに L がないので L が波及する）
↓
mùsò kélén （デフォルトで H が付与される）

(27) mùso 「女」 fìla 「 2 」 （両方の語彙に L が指定されている）
↓
mùso fìlà （前の語の L の波及は阻止され、
↓ 後ろの語の L だけが波及する）
mùsó fìlà （デフォルトで H が付与される）

L の波及は基本的には語の中でみられるものであるが、(23)、(24)で見たように補助詞やコピュラの場合に限り、語の境界を越えて L が波及すると考えられる。

H がデフォルトとして付与されるという考えは、(26)、(27)のような例ではうまく説明がつくが、1 音節の名詞の HL や LH のアクセントパターンを考えると無理があるように思われる。

(28) 1 音節の名詞 （ = (8) ）

HL	bâ「川、母」	sô「家」	jî「水」	dên「子供」	dôn「日」
LH	bǎ「ヤギ」	sǒ「馬」	cɛ̌「男」	sǎn「年」	kǔn「頭」

HL の L は限定詞の浮遊アクセント L が結びついたものであるが、語に H が指定されていなければ L だけが結びついて、たとえば *bà「川、母」のような誤ったアクセントになってしまう。また LH の場合は、語に L だけが指定されているとすると、L＋限定詞 L で LL となり、これも *bà「ヤギ」となるはずである。LH となるには、L と L の間に H を挿入するというアドホックな規則が必要になる。そう考えると、デフォルトとしてではなく、語のレベルで H を指定しておく必要があるだろう。

Rialland & Badjimé (1989) は語には L だけでなく H も指定されているとしている。さらに基底のアクセントに加えて、どの語にも右端に H が付随していると仮定している。これは「リエゾンの H」（ton haut de liaison）と呼ばれ、語の境界を示すためにどの語ももっているものであるが、必ずしもその語に結び付くわけではなく、右隣の語に結び付けられることもあるとしている。

Rialland & Badjimé がリエゾンの H を仮定するのに用いた例は、以下に示すような、断定を表す叙述文において、名詞が限定詞を伴う場合と伴わない場合のアクセントの違いである。バンバラ語では「～だ」という叙述は断定の補助詞 dòn を名詞の後ろにおいて表す。下の例はそれぞれ、a が限定詞を伴わない名詞、b が限定詞を伴う名詞の例である。断定の dòn のアクセントが下降調の HL であるか、単なる L であるかという違いがみられる。

(29)a. bá dôn 「川だ」
b. bá dòn 「その川だ」

(30)a. bálá dôn 「バラフォンだ」
b. bálá dòn 「そのバラフォンだ」

(31)a. bà dôn 「ヤギだ」
b. bǎ dòn 「そのヤギだ」

(32)a. mùsò dôn 「女だ」
b. mùsó dòn 「その女だ」

（Rialland & Badjimé 1989:6）

(29)、(30)は H 型の名詞、(31)、(32)は LH 型の名詞であるが、基底ではそれぞれの名詞に H と L が指定されており、さらにリエゾンの H が付随していると仮定される。そして

それぞれb.の例では､名詞の後ろに限定詞のLがある｡Rialland & Badjiméの説明によると、以下のようなアクセントの付与がおこなわれる（リエゾンの H は H で、限定詞は L で示してある。無印のアクセントは語に指定されているアクセントである)。

(29)'a. bá dôn 「川だ」

H H L

b. bá dòn 「その川だ」

H H L L

(30)'a. bálá dôn 「バラフォンだ」

H H L

b. bálá dòn 「そのバラフォンだ」

H H L L

(31)'a. bà dôn 「ヤギだ」

L H L

b. bă dòn 「そのヤギだ」

L H L L

(32)'a. mùsò dôn 「女だ」

L H L

b. mùsó dòn 「その女だ」

L H L L

（Rialland & Badjimé 1989:8-9）

名詞が限定詞を伴わない場合､それぞれ a. の例のように､リエゾンの H は後ろの dòn に結び付いて dôn という下降調（HL）アクセントを作る。限定詞を伴う場合は、それが阻止されてリエゾンの H は名詞に結び付き、それぞれ b. のように、名詞が HH、LH というアクセントになる（1 音節語の HH は H で実現する)。

限定詞の L はどこにも結び付かずに浮遊するが、限定詞の後ろに H がくる場合は、その H が少し低くなるダウンステップを引き起こす。下の (33), (34) のように、否定の断定を表す補助詞 tɛ́ が限定詞を伴う名詞の後ろにくると、少し低い H になる。

(33) bálá ꜜtɛ́ 「そのバラフォンではない」（ ꜜ: downstep）

| | |

H H L ꜜH

(34) mùsó ꜜtɛ́ 「その女ではない」

| | |

L H L ꜜH

（Rialland & Badjimé 1989:6）

名詞が単独で発音される時は、限定詞 L が語末に結び付くため、いずれの名詞も語末がリエゾンの H＋限定詞 L で HL という下降調になると考えられる。

3. まとめ

以上、バンバラ語のアクセントについて概観した。バンバラ語のアクセントは語単位でアクセントのパターンが決まっていると言われているように、語はすべての音節が H アクセントをもつ H 型か、前半が L で後半が H である LH 型に分けられるようにみえる。そして、それぞれ基底で H と L を指定すればよいと考えられている。従来の慣例的なバンバラ語のアクセント表記が、語頭に H か L だけをマークするのはそのためである。しかし実際には、少数ながら多様なアクセントパターンがみられ、それらは個別にアクセントを指定しておく必要がある。また、LH 型といっても 3 音節以上の語では複数のパターンがあり得るので(たとえば 3 音節であれば LLH と LHH)、これも個別に指定しておく必要がある。一方、複合語のアクセントは全体が H 型か LH 型になる。LH 型の場合は前の語が L、後ろの語が H と規則的であり、複合語としての型が決まっているといえる。

2.3 節で見たように、名詞＋数詞や文中にあらわれる LH の語には LL へのアクセント変化がみられる場合がある。具体的には、その後ろに L がない場合（つまり H があるか何もないか）であるが、この変化を説明するために LH の語の H が基底では指定されていないと考えるのは有効である。基底では L だけが指定されており、それが右隣の音節に波及するが、その後ろに L がある場合は波及が阻止されて H になる。この H がデフォルトの H であるのか「リエゾンの H」であるのかという議論であるが、1 音節語に LH のアクセントがみられることから、デフォルトではなく何らかの形であらかじめ H が指定されている

と考える方が妥当であろう。リエゾンの H というのは、語がもつと仮定される浮遊アクセントで、後ろの語にも結び付くことができ、また文末ではどこにも結び付かないものである。リエゾンの H を仮定すると、1、2 音節の LH の語（たとえば bǎ「ヤギ」や mùsó「女」）は基底では L だけが指定されており、3 音節の LLH の語（たとえば nàmàsá「バナナ」）は L だけ、LHH の語（たとえば jàkúmá「ねこ」）は LH が基底で指定されることになる。

本稿ではバンバラ語のアクセントのパターンを示し、LH 型に見られる変化について自律分節的なアクセントの付与の仕方を示唆するに留めている。リエゾンの H が一般的な自律分節的音韻論に照らし合わせてどこまで妥当であるのか、またバンバラ語の他のアクセントの現象を統一的に説明するにはどのようなアクセント指定と付与の規則が妥当であるかなどについては、さらに今後の検討が必要である。

略号

COP　コピュラ	EXCL　感嘆詞	NEG　否定	PERF　完了
PERFintr　完了（自動詞接辞）		PP　後置詞	PRES　現在
QST　疑問標識	1s　1 人称単数代名詞	3s　3 人称単数代名詞	

参考文献

Bird, Charles & Mamadou Kanté. 1976. *An Ka Bamanankan Kalan: Intermediate Bambara*, Indiana University Linguistics Club.
（録音資料：http://www.iu.edu/~celtie/Bambara-Intermediate.html）

Bird, Charles & John Hutchinson & Mamadou Kanté. 1977. *An Ka Bamanankan Kalan: Introductory Bambara*, Indiana University Linguistics Club.
（録音資料：http://www.iu.edu/~celtie/Bambara-Intro.html）

Creissels, Denis & Claire Grégoire. 1993. “La notion de ton marqué dans l’analyse d’une opposition tonale binaire: Le cas du Mandingue”, *Journal of African Languages and Linguistics*, vol. 14-2, pp.107-154.

Dumestre, Gérard. 2003. *Grammaire Fondamentale du Bambara*, Paris: Karthala.

Fonana, Amadou Tidiane & Mamery Traoré. 2003. *Bamanankan Learners' Reference Grammar*, National African Language Resource Center, University of Wisconsin- Madison, Global Academic Publishing.

Kastenholz, Raimund. 1998. *Grundkurs Bambara (Manding) mit Texten*, Köln: R.Köppe.

Rialland, Annie & Mamadou Badjimé. 1989. “Reanalyse des tons du Bambara: Des tons du nom a l’organisation generale du system”, Studies in African Linguistics, vol. 20-1, pp.1-28.